

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 31 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26870644

研究課題名(和文) 文明形成過程における肥沃な三日月地帯とメソポタミアとの交流関係

研究課題名(英文) The Regional Relationship between the Fertile Crescent and Mesopotamia during the Urbanization Process

研究代表者

小高 敬寛 (Odaka, Takahiro)

東京大学・総合研究博物館・特任助教

研究者番号：70350379

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：農耕社会の起源地「肥沃な三日月地帯」の中で、都市文明の発祥地・メソポタミア低地と接するシャフリゾール地域を対象として、低地開発の始まる前7千年紀後葉から都市形成期にあたる前4千年紀までの考古学的編年案を土器資料から構築した。地域の物質文化には一貫して独自性が認められるが、それはメソポタミア低地だけでなく、多方面の隣接地域からの影響が混ざり合って醸成されていた。シャフリゾール地域を介して、メソポタミア低地が各地との地域間関係を維持していたことの証左になるだろう。都市文明がメソポタミア低地だけでなく、周縁を含めた広域的な社会基盤に支えられて成立した事実を強く示唆する研究成果が得られた。

研究成果の概要(英文)：The Shahrizor Plain is situated within the so-called Fertile Crescent, the land of the oldest Neolithization, while the location opens to the Mesopotamia Lowland. Focusing on the time from the dispersal into the lowland to the Urbanization, this study proposed an archaeological chronology in this plain from the late 7th to the 4th millennium BC. The examinations of the archaeological evidences demonstrated the continuous influences of various regions including the Mesopotamia Lowland and the surrounding areas in the Fertile Crescent. Consequently such influences had been mixed and generated a peculiar character of the material culture in the Shahrizor Plain. This phenomenon indicates that the Mesopotamia Lowland had kept the relationship to various directions in the Fertile Crescent through the Shahrizor Plain. In addition, it strongly suggests that the Urbanization in the Mesopotamia Lowland had been supported by the social foundation built in much larger area including the periphery.

研究分野：近東考古学

キーワード：都市化 地域性 土器 編年

1. 研究開始当初の背景

メソポタミアは前 3100 年頃、人類史上いち早く都市化を遂げ、文明社会を成立させたことで知られる。ただし、20 世紀半ばに実施されたイラク北東部ザグロス山麓域における一連の遺跡調査(イラク=ジャルモ計画)が明らかにしたように、その前提には、周囲をとりまく「肥沃な三日月地帯」での定住生活や農耕・牧畜による生産経済の確立があった。現在、生産経済の確立を含み一連の革新は、地勢的に分かたれた小地域における個々の文化変化に始まり、地域間交流によって「三日月地帯」を通底する歴史的潮流(新石器化)となっており、更には前 7 千年紀末頃、それまで無人の荒野であったメソポタミア低地に及び、都市文明の基盤を成したと考えられている。

よって、文明の形成過程を理解するためには、「三日月地帯」がメソポタミア低地と接する地域を中心とした地域間の交流関係を把握することが重要な課題となる。この課題に対して、かつてはハムリン・ダム水没地域など、イラク東部を舞台とした調査・研究が断続的に行われていた。ところが、イラクの政情が悪化した 1980 年代以後、実地調査は 30 年近くにわたって中断を余儀なくされてしまった。

しかし、治安の回復したイラク北東部クルディスタン自治区では、2009 年に本格的な調査活動が再開された。なかでもハイデルベルグ大学は、スレイマニヤ文化財局と合同でクルド自治区の南東端、即ちメソポタミア低地に近接するシャフリゾール地域(図 1)で遺跡分布調査を開始した。この調査はミュンヘン大学に引き継がれて、これまで 150 件以上もの遺跡が確認されてきた。この成果を受けて、ライデン大学は同地域内に所在するテル・ベグム遺跡の発掘調査を実施したが、研究代表者はこれに現場主任として参加した。この調査では、前 5~4 千年紀と推測される良好な文化層の遺存が認められた。また、遺跡分布調査によって表面採集された、先史時代の考古資料の調査・研究にも従事することになった。この資料の帰属年代は、前 7 千年紀後葉から前 4 千年紀末までが推測されている。つまり、目下のところ実地調査可能な範

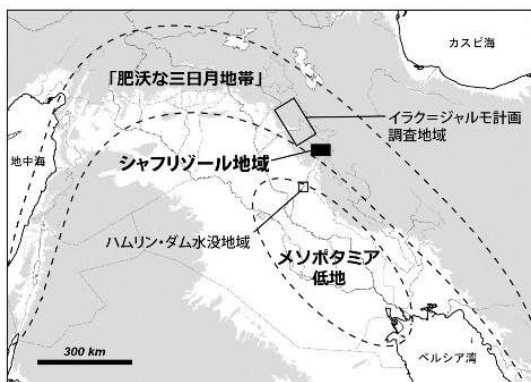


図 1 シャフリゾール地域の位置

囲の中ではメソポタミア低地に最も近い「三日月地帯」の一角で、新規の調査によって収集された、メソポタミア低地の開発から都市文明誕生に至るまでの時代に当たる、断続的な考古資料に接する機会を得たわけである。

2. 研究の目的

(1) 土器を中心とする考古資料の調査に基づき、シャフリゾール地域における前 7 千年紀後葉から前 4 千年紀までに至る編年を構築する。

(2) シャフリゾール地域を介した「三日月地帯」とメソポタミア低地との交流関係について、文明誕生に先立つ約 3 千年間にわたって、物質文化の側面から通時的に追跡する。

(3) 以上を通じて、「三日月地帯」とメソポタミア低地との地域間関係の変遷について解釈し、現代社会の基盤を成した都市文明の形成過程という人類共通の歴史的テーマの理解に寄与する。

3. 研究の方法

(1) 2013 年に実施したテル・ベグム遺跡の発掘調査によって得られた考古資料、とりわけ属性が多様で変移幅も広い土器資料を主な対象として、スレイマニヤ文化財局にて調査し情報を収集した。その後、国内に持ち帰った調査記録をデータベースに入力するなどの整理作業を経て、型式学的な分析を行った。同時に、発掘調査時に採取した炭化物サンプルを用い、放射性炭素年代測定を行った。

(2) シャフリゾール地域の遺跡分布調査によって表面採集された資料について、同様に土器資料を中心に調査し、前 7 千年紀後葉から前 4 千年紀までの型式学的変化を検討した。調査した資料が採集された遺跡の数は、最終的に 43 件を数えた。

(3) 以上の調査成果とシャフリゾール地域で各国隊が発掘している諸遺跡からの所見を総合することにより、前 7 千年紀後葉から前 4 千年紀までの考古学的な手続きに則った編年の整備を進めた。

(4) できあがった編年に沿って、シャフリゾール地域における物質文化の変遷と、かつて調査されたイラク=ジャルモ計画の対象遺跡(「三日月地帯」のより北側)やハムリン・ダム水没地域(メソポタミア低地北東端)など、近隣の事例とを比較することで、「三日月地帯」他地域からの影響およびメソポタミア低地との類似性を通時的に評価した。

(5) 2014 年から 2015 年にかけては、ISIL に対する有志国の軍事行動の余波を受けて、イラク・クルディスタン自治区での調査活動

を中断した。そこで、当初の計画に加えて、東京大学総合研究博物館に所蔵されている、1950～60年代に近隣遺跡から表面採集された先史時代土器資料の再調査を行なった。その調査成果を(4)の際に比較対照する事例として活用した。

4. 研究成果

(1) テル・ベグム遺跡の帰属年代は前5～4千年紀と推測されていたが、改めて出土土器の調査と型式学的検討を詳細に行なった結果、ジャジーラ地方(北メソポタミアのステップ地帯)のいわゆるハラフ=ウバイド移行期との類似性が認められる土器(図2)と、LC1～3期との類似性が認められるものに分類できた。層位学的な所見と照らし合わせても、前6千年紀後半および前4000年前後という、二つの時期の所産である可能性が高まった。

そこで、前者の土器が出土した層位の炭化物サンプルを用い、放射性炭素年代測定を行なったところ、前5400年前後という値が得られた(表1)。型式学的所見を支持するとともに、推定年代の幅を狭めることができた。また、後者の年代測定も同様に試みたが、残念ながらサンプル不良のため、失敗に終わった。

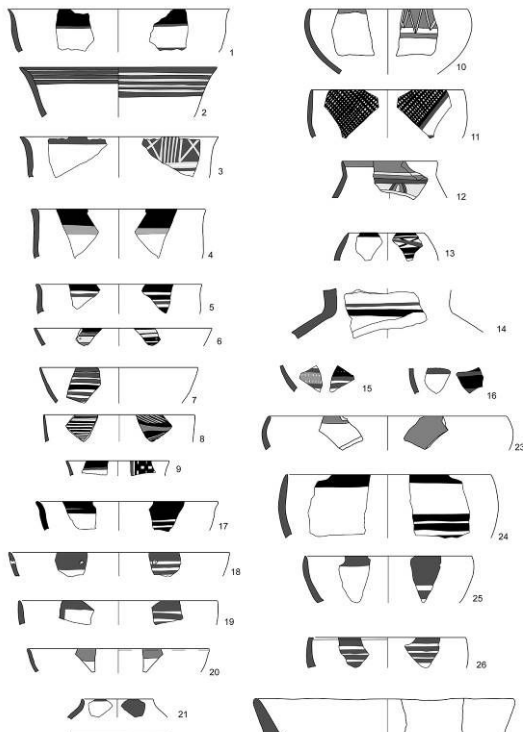
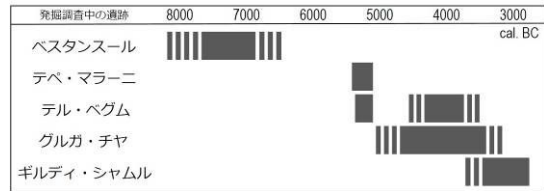


図2 テル・ベグム遺跡出土土器

表1 テル・ベグム遺跡の放射性炭素年代

Lab ID	¹⁴ C yr bp	cal BC (2SD)
TKA-16627	6463 ± 41	5488 (95.4%) 5337
TKA-16628	6348 ± 45	5466 (15.3%) 5404 5386 (80.1%) 5224
TKA-16629	6420 ± 51	5478 (95.4%) 5317

表2 シャフリゾール地域の編年案



(2) (1)の成果とシャフリゾール地域の表面採集資料、および発掘調査中の諸遺跡から出土した資料の所見を総合し、従前より精細な前6千年紀半ば以降の地域編年案を構築した。表2は、発掘調査中の遺跡の時代をその編年に当てはめたものである。

ジャジーラ地方から拡散したハラフ文化がシャフリゾール地域に到達したのは、(1)の年代測定結果によって前6千年紀半ば以降と考えられ、ロンドン大学が発掘したテペ・マラーニ遺跡の出土資料と年代測定結果からも裏付けられる。この時代に同定可能な表面採集資料は量的に多くないが、19件もの遺跡で散発的にみつがっている。

前5千年紀は、メソポタミア低地からジャジーラ地方に広がったウバイド後期文化が当地にも及ぶ。放射性炭素年代の傍証は得られていないものの、同じくロンドン大学が発掘したグルガ・チャ遺跡の出土資料がその代表例に当たると考えられ、同様の資料はシャフリゾール地域内22遺跡で表面採集されていた。

そして、前4千年紀に入る頃からはジャジーラ地方のLC文化とメソポタミア低地のウルク文化に類似する物質文化の存在が認められる。テル・ベグム遺跡では年代測定に失敗したが、グルガ・チャ遺跡ではわずかながら放射性炭素年代が得られている。表面採集資料にも、23件に及ぶ遺跡で同様のものが認められる。

以上のように、前6千年紀後半から前4千年紀までについては、発掘調査による出土資料を軸として表面採集資料を型式学的に位置づけ、おおよその編年を構築することができた。

しかし、これ以前については、前7千年紀後葉、ジャジーラ地方東部に分布するハスーナ土器の一部と対比できる土器が二、三の遺跡で表面採集されているのを確認するにとどまった。特に、前6千年紀前半については、ジャジーラ地方のハラフ前～中期文化やメソポタミア低地のサマッラ～チョガ・マミ移行期文化など、周辺地域の物質文化と型式学的に対比できる資料が皆無で、未解明のままに残された。

(3) 各時代の物質文化、特に土器は、上述したようにジャジーラ地方やメソポタミア低地との共通性がみられる反面、分布がシャフリゾール地域周辺だけに限定される独自性も認められた。

例えば、テル・ベグム遺跡の前5400年頃

の土器とジャジーラ地方のハラフ＝ウバイド移行期土器には、断面S字形の鉢など特徴的な器形が共通してみられ、時系列上でも併行関係にある。しかし、特異な白色彩文や横走線の繰り返しによる単純な文様構成の多用、具象文の乏しさなどは、ジャジーラ地方の傾向と相反する。また、これらの特徴は、通常ハラフ土器とはみなされない、イラン、マヒダシュト平原の土器にも観察できる。シャフリゾール地域の独自性は、西方のジャジーラ地方だけでなく、東方のイラン高原からの影響が混ざりあって醸成されたものと考えられる。

こうした独自性は、前5～4千年紀においても一貫して認められた。メソポタミア低地が開発された後、シャフリゾール地域の物質文化にはハムリン・ダム水没地域をはじめとした低地からの影響が表れてくるものの、それだけでなく、多方面からの様々な影響を引き続き受けていたことが窺える。都市化の時代、メソポタミア低地がシャフリゾール地域を介し、その先の各地にまで及ぶ「三日月地帯」との複雑な地域間関係を維持していたことの証左にもなるだろう。都市文明がその起源地にあたるメソポタミア低地だけでなく、周縁を含めた広域な社会基盤に支えられて成立した事実を改めて示唆する、実証的なデータを得ることができた。

(4) 前6千年紀前半における編年的空白の問題を解決すべく、前7千年紀後葉のハッスーナ土器に類する土器が最も多くみつかったシャイフ・マリフ遺跡の資料を詳細に調査した(図3)。その結果、この種の土器にもジャジーラ地方の典型的なハッスーナ土器とは異なった特徴が観察され、強い独自性が認められた。とりわけ注目されるのは、一部の土器にみられる胎土の精良さで、その質はハッスーナ土器よりも、後続するハラフ土器に近似するものであった。一方、ハラフ土器で

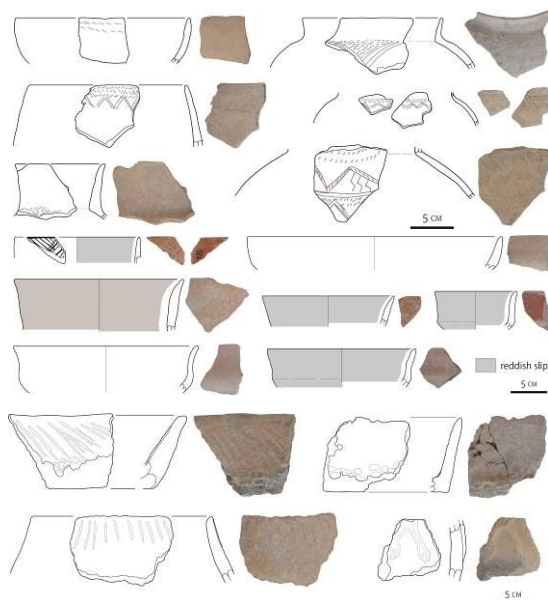


図3 シャイフ・マリフ遺跡表面採集土器

はごく一般的で、ハッスーナ土器にも少なくない、彩文装飾は極めて乏しかった。

以上の調査結果から、前7千年紀後葉のシャフリゾール地域には、彩文装飾をほとんど伴わないハッスーナ土器の変種が存在していたと考えられる。そして、前7千年紀末にジャジーラ地方でハラフ土器が登場すると、まもなくしてその影響が及んだものの、地域的な伝統からか、彩文による装飾は当初拒絶され、精良な胎土のみが受け入れられたと解釈することもできるだろう。したがって、胎土の精良化したハッスーナ土器に類する土器が、前6千年紀半ばまで存続していた可能性が考えられる。

無論、この推測を確かめるには、遺跡の発掘調査を介した層位学的な検証と理化学的年代測定が不可欠であり、次なる研究課題として残された。

(5) 東京大学総合研究博物館に所蔵されている表面採集資料は、(4)の所見を踏まえて前7千年紀後葉から前6千年紀前半までのものを中心に調査した。特に重きを置いたのは、イラク＝ジャルモ計画の調査遺跡であるマタツラ遺跡と、ハッスーナ文化の示準遺跡であるテル・ハッスーナ遺跡から採集された土器である。

テル・ハッスーナ遺跡の表採土器と比較することにより、特に刻文装飾の文様単位と胎土の精粗に関して、シャイフ・マリフ遺跡採集土器の特異性を改めて確認できた。一方、マタツラ遺跡採集土器との比較においては、文様単位の点で類似が認められ、胎土にも似通った例が存在することが分かった。但し、ハッスーナ遺跡とマタツラ遺跡の間でも共通点も多い。マタツラ遺跡の採集土器は、典型的なハッスーナ土器とシャフリゾール地域における前7千年紀後葉の土器との中間の様相を示す。

これらの遺跡は、残念ながら治安が危惧される地域に立地しており、当面は資料の増加等が見込めない。しかし、シャフリゾールないしイラク・クルディスタン自治区を含めて、将来的にハッスーナ土器の地域性を論じていく上で、重要な示唆を得ることができた。

(6) 本研究の成果を報告し、次なる研究の展開へとつなげるべく意見を交わすため、平成30年2月16日に国内外の研究者3名を講演者として招き、国際ワークショップ“Between the Zagros and Mesopotamia: Archaeology of the Diyala Valley in Iraq”を開催した(図4)。

議論の結果、シャフリゾール地域は通時的に固有の独自性を維持していることを確認し、今後はその詳細な内容を時代ごとに精査していくとともに、同地域に接する「三日月地帯」内外との多面的な地域間関係の中で解釈すべきであるとの意見で一致した。また、メソポタミア低地の開発プロセスを追跡す

WORKSHOP

Between the Zagros and Mesopotamia

Archaeology of the Diyala Valley in Iraq

February 16th, 2018

The University Museum,
The University of Tokyo

13:30-13:40 Opening Address
13:40-14:25 Japanese Contribution to the Rescue Excavations in the Hinrin Dam Area
Ken Matsumoto (Kokushikan University)
14:25-15:10 The Late Neolithic in the Shahrizor: Tell Begum and Shaikh Marif
Takahiro Odaka (University of Tokyo)
15:25-16:10 Landscape and Settlement in the Shahrizor Plain
Simone Muehl (Leipzig/Mannheim University of Manich)
16:10-16:55 Excavations at Yasin Tepe and Its Historical Context
Shigeo Yamada (University of Tsukuba)
Shin Akiyama (Chubu University)
Akira Yanagi (University of Tsukuba)
Hiroshi Nomura (Kokushikan University)
16:55-17:00 Closing Address

JSPS 科学研究費補助金 (JP26870644) 助成事業
公開ワークショップ
ザグロスと
メソポタミアのあいだ
イラク・ディヤラ川流域の考古学

日時 2018年2月16日(金)
13:30~17:00

会場 東京大学総合研究博物館
(東京都文京区本郷7-3-1)
地下1階 企画展示室
東京メトロ丸の内線・池袋駅東口改札
(本郷三丁目) 駅より徒歩3~6分

講師・研究報告
依布・健 (国士館大学)
小高 敬寛 (東京大学)
シモネ・ミュール (ミュンヘン大学)
山田 重郎 (筑波大学)

申込不要・入場無料
参加費は別途です。お問い合わせ先。

お問い合わせ
東京大学総合研究博物館・小高 敬寛
E-mail: odakagum@u-tkyo.ac.jp

図4 国際ワークショップの開催告知チラシ

るためには、まず前6千年紀前半の編年的空白を埋めることが必要不可欠と認められ、その解決策として、シャイフ・マリフ遺跡の発掘調査の実施が強く望まれた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

Olivier Nieuwenhuysse, Takahiro Odaka, Akemi Kaneda, Simone Muehl, Kamal Rasheed, Mark Altaweel “Revisiting Tell Begum: A Prehistoric Site in the Shahrizor Plain, Iraqi Kurdistan.” *Iraq* 78: 103-135, 2016 (査読有). DOI:10.1017/irq.2016.7

[学会発表](計13件)

小高敬寛「マタツラ遺跡で採集された新石器時代の土器」日本西アジア考古学会第23回大会、2018年。

Takahiro Odaka (代表), Olivier Nieuwenhuysse, Simone Muehl “From the seventh into the sixth millennium in the Shahrizor, Iraqi Kurdistan: Filling the gap.” 11th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East, 2018.

小高敬寛(代表) オリフィア・ニウウェンハウゼ、シモネ・ミュール「新石器化と都市化のはざま イラク・クルディスタン、シャイフ・マリフ遺跡の予備調査(2012~17年)」第25回西アジア発掘調査報告会、2018年。

Takahiro Odaka “The Late Neolithic in the Shahrizor: Tell Begum and Shaikh Marif.” Workshop, Between the Zagros and Mesopotamia: Archaeology of the Diyala Valley in Iraq, 2018.

小高敬寛(代表) オリフィア・ニウウェンハウゼ、シモネ・ミュール「イラク・クルディスタン地域、シャフリゾール平原の前6000年前後」日本オリエント学会第59回大会、2017年。

小高敬寛(代表) オリフィア・ニウウェンハウゼ「イラク・クルディスタン地域、テル・ベグム遺跡出土のハラフ土器 その年代と地域性」日本西アジア考古学会第22回大会、2017年。

Takahiro Odaka “Halaf Pottery and the Radiocarbon Dates of Tell Begum.” Expert meeting, The Later Prehistory of the Shahrizor: Discoveries and Questions, 2016.

Olivier Nieuwenhuysse (代表), Takahiro Odaka, Akemi Kaneda, Simone Muehl, Kamal Rasheed, Mark Altaweel “Revisiting Tell Begum. A prehistoric site in the Shahrizor, Iraqi Kurdistan.” 10th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East, 2016.

Olivier Nieuwenhuysse (代表), Takahiro Odaka, Akemi Kaneda, Simone Muehl, Kamal Rasheed, Mark Altaweel “Prehistoric pottery from Tell Begum (Iraqi Kurdistan).” 10th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East, 2016.

Takahiro Odaka “Current Issues of the Late Neolithic in the Shahrizor Plain.” Symposium, The Japanese Contribution to Kurdistan Archaeology, 2016.

Takahiro Odaka “Around 6000BCE in the Shahrizor Plain: Research Perspectives.” Symposium, Prehistoric Archaeology in the Shahrizor (Iraqi Kurdistan): Prospects & Challenges, 2015.

小高敬寛(代表) オリフィア・ニウウェンハウゼ、シモネ・ミュール、カマル・ラシード「イラク・クルディスタン、テル・ベグム遺跡の先史時代土器: 2013年の収集資料」日本西アジア考古学会第20回大会、2015年。

小高敬寛「イラク・クルディスタン、シャフリゾール地域の考古遺跡調査」文化遺産国際協力コンソーシアム第23回西アジア分科会、2014年。

[図書](計1件)

Olivier Nieuwenhuysse, Takahiro Odaka, Simone Muehl “Halaf Settlement in the Iraqi Kurdistan: the Shahrizor Survey Project.” In K. Kopanias, J. MacGinnis (eds.), *The Archaeology of the Kurdistan Region of Iraq and Adjacent Regions*,

pp.257-266. Archaeopress, 2016.
<http://www.archaeopress.com/public/download.asp?id={58530284-6A74-4BF3-BD4B-B51EBB0B7B7E}>

〔その他〕

学界動向（計4件）

小高敬寛「イラク・クルディスタンでの遺跡調査」『Ouroboros』21巻1号：12-14, 2016年。

http://www.um.u-tokyo.ac.jp/web_museum/ouroboros/v21n1/v21n1_odaka.html

小高敬寛「『近東後期新石器時代の装飾土器を探る』第2回ワークショップ」『西アジア考古学』17号：173-177, 2016年。

小高敬寛「イラク・クルディスタン地域よみがえった考古学のフロンティア」野口淳、安倍雅史（編）『イスラームと文化財』pp.91-96、新泉社、2015年。

小高敬寛「イラク・クルディスタンで遺跡を掘る」『オリエンテ』49号：3-8, 2014年。

一般講演（計2件）

小高敬寛「メソポタミアへの再接近 遺跡調査の現場から」日本西アジア考古学会特別講演会、2014年。

小高敬寛「イラク・クルディスタン、よみがえった遺跡調査の日々」岡山市立オリエンテ美術館特別講演会、2014年。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小高 敬寛 (ODAKA, Takahiro)
東京大学・総合研究博物館・特任助教
研究者番号：70350379